愛しのエリー。

Maria

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

愛しのエリー。

【Ｎコード】

Ｎ３３７２Ｙ

【作者名】

Ｍａｒｉａ

【あらすじ】

サボテンとエリーの愛しい二人暮らし。―サボテンが喋った！？

Ｌｏｖｅｌｙ！・・素敵な贈り物。

「どうせ私なんて…可愛くないし、だめなんだよ。」

矢田エリー。
昔からこの名前が嫌いだった。
私に似合わないこんな可愛らしい名前なんて、いらないよ。

今日は雨。
ううん、予報じゃ曇りだった。
なのに外に出て歩き出したとたん急に降り出したんだ。
どうやら天気まで私に冷たい。

「別にいいけどさ…」
古びた黒い靴を見つめながら一人、つぶやいた。

８：４５。
いつもと変わらない朝。
いつもと同じ風景。
もしもこの世界が月９のラブストーリーだったとしたら、私は脇役？
なんて良いものじゃない。
所詮、私なんてセリフの一言もないただのエキストラだ。

「ん？え…太陽？」
ふと傘を上げるとさっきまでの雨が降りやんでいて、グレーの雲の
間から一筋の太陽の光りが射しこんでいた。
その光りが水たまりに反射してとってもきれいだ。

”Ｈａｐｐｙ　Ｂｉｒｔｈｄａｙ，Ｌｏｖｅ　ｆｏｒ　ｙｏｕ．．”

可愛らしいお花屋さんらしき店頭にたくさん並んだ贈り物。

ピンクや水色、真っ赤なリボン…とおめかしして並んでいる。

「サボテン…？可愛いな。」

「ありがと♪」

「え…っ！？いま喋っ…」

まだ寝ぼけているのだろうか。
サボテンから話し声が…

「いらっしゃいませ。ごめんなさい、まだ開店前で…」

わ―っ！
綺麗な人。

「いいえ。あの、見てただけなので…何でもないです！」

私はそそくさと花屋をあとにして仕事場へと向かった。

１２：３０。
いつもと変わらないお昼休み。
いつもと同じ１時間休んでまた仕事に戻る。

朝、駅のコンビニでてきとうに選んだおにぎりとお茶を片手にランチタイム。

それにしてもあんな場所に花屋さんなんてあったっけ。
全然知らなかった。
いや、そもそも私はいつも下ばかり向いて歩いているから、はじめからあったとしても、きっと絶対気付かない。

１８：００。
「退勤、っと。」
パソコンに私の嫌いな名前と名前より大切な社員番号を打ち込んで会社を後にする。
大切な社員番号がなければ、会社（ここ）では「私」ではない。

会社終わりはたいてい真っ直ぐに帰る。

だけどそのつもりの心とは逆に、私の足はあのお花屋さんへと寄り道をしていた。

あっ、朝の店員さんだ。
…って向こうは覚えていないだろうけど。

「いらっしゃいませ！朝はどうも。お仕事帰りですか？お疲れさまです。」

――キラキラ♪

心が一瞬ふわっと揺れた、そんな気がした。

「あの…あのサボテン、下さい！」

思わず口から飛びだした言葉に、自分でもとても驚いていた。

すると綺麗な店員さんは、優しい微笑みでサボテンを持ってきてくれた。

「リボン何色になさいますか？」

「え？」

「お誕生日だし赤とピンクかな、やっぱり。」

「はい。それじゃあその色で…」

もちろん今日は誰の誕生日でもない。
だけど何か買わなきゃって、このサボテンが欲しいって、なぜだかそう思ったのだ。

可愛くラッピングされた贈り物を手に、店員さんはこんな素敵な言葉をくれた。

「ハッピーバースデー。」

「ありがとうございます。」

お店を出た私の帰り道は、いつもと少しだけ違っていた。
だって今日は私、笑って歩いている――♪

―次の日の朝。

「ん～、朝だ。起きるか…」

今日は日曜日。
私の休みは水曜日と日曜日の週休２日。
だけど休日の過ごし方といえば、たいていはお昼くらいまで寝て、
掃除に洗濯をして、ちょっとパソコンでもいじっていたら終わって
しまう。
何でもない一日だ。

「そんなのもったいない！」

「ん…？え…何いまの？」

またあの声が聞こえた気がした。
また私、寝ぼけ…

「こっちだよ！こ～こ！サ・ボ・テ・ン！」

それはまぎれもなく、出窓の上で可愛くおめかししているあのサボテンから聞こえてくる。

「…？まさかね。」

きっと夢でも見ている。
そう思うことにしよう。
もう一度ベッドにもぐり込んで…

「こら！起きろ～！こ～んなにいいお天気なのに！素敵な日曜日が

もったいないよ！！」

—ガバッ！

「…！！！サボテンが喋ってる…」

ツンツン。
…痛い。

「んふふ…くすぐったいよエリー♪おはよう！」

「おは、よう…？」

その日からサボテンと私の愛しき二人暮らしが始まった。

Ｌｏｖｅｌｙ２．．ラブリーサンデー。

サボテンの口ぐせ。

「エリー。女の子はね、誰でもみんなお姫様なんだよ。」

なわけないっす。

でも彼女は曲げない。
けっこう、いやかなりの頑固者。

「エリーだってお姫様なんだから♪」

「私なんてただの女の子だよ。」

「そうだよ。ただの女の子だからお姫様なの。」

※彼女の名前は以下サボンとする。

「可愛いでしょ♪そう呼んでね。」
と一日目からの彼女からのお願い。

サボンが家に来て初めての朝。

「いい？まず朝起きたらカーテンを思いっきり開く！そして朝日をいっぱい浴びるの♪」

「なんで…？」

「エリー、想像してみて。もしもあの太陽からとっても可愛くなれるキラキラが降り注いでいたらどうする？」

「…？」

「朝慌ただしくただ出掛けて行く人と、キラキラシャワーをい～っぱい浴びて出掛けて行った人、どっちが可愛くいられると思う？」

「…。」

首をかしげすぎて、倒れそうになってしまった。

「とにかく、ほら！カーテンを開けてキラキラシャワーを浴びてみて♪」

「いいよ私は…だいたいそんなので可愛くなれるんならみんなやってるって…」

そう言ってめんどくさがりながらも私はカーテンを開いた。

「ん…まぶし―っ！」

わ～ぁ、きれい！
日曜日の朝の太陽は、思っていたよりもキラキラしている。
青い空も晴れわたっていて、何かいい感じだ。

「さっ♪シャワーも浴びたことだし、エリー。私にもお水ちょうだい♪」

「え、あぁ、うん。」

―シュッ、シュッ！

「ん～、気持ちいい！ありがとうエリー♪」

「…どういたしまして。」

―

太陽のキラキラシャワーを浴びたあと、私は何故か出掛けることになった。

「ねぇ、サボテ…いやサボン。お休みっていうのは、何にもしないで休むからお休みなわけで…だからさ、」

正直せっかくの日曜日は何もせずにだらだらと過ごしていたい。
でもサボンはかなりのがんこちゃんだ。

「だめだめだめ〜！今日はせっかくのお休みなんだよ。可愛く過ごせる大チャンスの日だよ。とりあえずお気に入りの洋服を着て、めいっぱい可愛くしてお出掛けしておいでよ♪きっとすっごく楽しいよ☆」

私はしふしぶ家を出た。

「それにしても本当にいい天気だな〜。」

日曜日に出掛けるなんて、（しかも何の予定もないのに。）本当に久しぶりだ。

あ、犬。
可愛い。犬まで可愛らしい洋服を着てる。
いや着させられてるだけか。

あ、この庭に咲いてる花可愛いな。
なんていう花だろう。

あ、あの赤ちゃんあくびしてる。
パパも一緒につられてるし。
幸せそうだなぁ。

「あっ！そうだ…私サボンからのメモ」

私は慌ててポケットの中に右手を入れてみた。

サボンは出掛ける前にいくつかメモするようにと言って話してくれ

た。
最っ高にラブリーな一日にするためにどれも必要なことらしい。

Ｌｏｖｅｌｙ１．周りをよ～く観察して歩く。
（×下を向かないこと。）
とりあえず１は大丈夫そうだ。今のところ。

Ｌｏｖｅｌｙ２．可愛いものを三つは買うこと。
（×ただ見ていて満足はだめだよ！）
でもどうせ私には似合わないし…ってきっとこれがダメなのだろう。

「いらっしゃいませ～。何かお探しですか？」

思わずお洒落そうな下着屋さんに入ってはみたものの…

耐えられないっ！

綺麗な店員さんが最高の微笑みで見つめてくる。

Ｌｏｖｅｌｙ３．恥ずかしがらずに手をのばしてみる。
…よしっ！

「えっと…えっ…と、こういう可愛い感じのものが欲しいなっと思って…」

「可愛い…のですか。」

あぁ、一刻も早く帰りたい…。
恥ずかしすぎる…。
やっぱり見ているだけにすれば良かっ…

すると店員さんが奥の方からピンク色の下着の上下セットを手に持ってきてくれた。

「お客様にはこちらなどがお似合いになるかと思いますよ♪」

「…！いや、やっぱり私、」

Ｌｏｖｅｌｙ４．たまには他人の意見に思いきって乗ってみる！

「…似合い…ますかね。」

「はい！お客様の白いお肌にぴったりだと思いますよ♪ご試着してみますか？」

「は、はい！」

私…こういう可愛いものも似合うのかな。
何かちょっと嬉しいな♪

それからその後に寄ったお店でバスセットとアロマランプも買ってみた。
両手に紙袋を持って歩くなんて…
何だかちょっとヒロインみたいだ。

お給料、普段使っていなくって良かった。
一生懸命働いたお金で自分へのご褒美を買う。
単純かもしれないけどすごく素敵なことなんだって、初めてそう思った。

だって私、何かいまとっても楽しい♪

―ガチャ♪

「ただいま～！サボン、ただいまっ♪」

「おかえり、エリー♪楽しかった？」

「うん！まぁ…ね♪」

「よかった！」

帰って来てから眠りにつくまでの間ずっと、私はサボンに今日あったことをひたすら話していた。

おやすみの言葉と一緒にサボンは言った。

「最高にラブリーな日曜日になってよかったね。これで今夜は微笑みながら眠れるね♪」

「え？微笑みながら…？」

「うん！眠る瞬間は素敵なことを想い出して眠るの。そうしたら夜中優しい表情(かお)で眠れるから、必然的に朝も素敵な表情～♪」

「なるほど…」

確か何かの記事で昔読んだことがある。
眠る時に嫌なことや難しいことを考えて眠ると、そのまま眉間にしわや怖い顔になってしまうって。

私がよく無表情だとか覇気がないなんて言われる理由が少し理解った気がした。

「エリー、おやすみなさい♪」

出窓のサボンに月の光りがあたって何だか少しロマンティック。

私はベッドに横になりサボンを見つめた。

「うん。おやすみ、サボン。」

そうして瞳を閉じてそっと眠りについた。
優しく微笑みながら…

Ｌｏｖｅｌｙ３．．素敵なお昼休み。

―キラキラキラキラ♪

「ん～…！」

カーテンを開いてキラキラシャワーを浴びる。
月曜日の朝もまぶし…

…くはない。
だって今日は雨だ。

そうだった。

天気は私に冷たいのだった。

そんな私にサボンが言葉をかけてきた。

「雨なんて…何だかドラマティックで素敵っ！」

思わず笑ってしまう。
都合が良すぎて何かとってもおかしいもん。

するとサボンは続けた。

「エリー。女の子はみんなお姫様なんだよ？ヒロインなんだよ？すべては主役を輝かせるためのキラキラの”かけら”なんだから♪」

…確かに。
言われてみれば甘いラブストーリーに雨はいつも欠かせない。

「ねぇ、エリー？今日は早起きして時間があるしお弁当でも作って行けば？」

ベッドの横の時計に目をやってびっくりした。
だってまだ目覚ましが鳴る前。
いつもより３０分以上も早く起きてしまったようだ。

再びベッドにもぐりこみながら私はサボンに向かってつぶやいた。

「ラッキー♪もうちょっと眠れる…痛っ――！」

信じられない！
飛んできたものはサボンのトゲだった。

「分かったよ…は～ぁ。」

しぶしぶベッドから起き上がってキッチンへと向かう。

「お弁当なんて作ったことないよ…何か入れられるものあったかな〜？」

一人暮らしの冷蔵庫なんて男子も女子もきっと変わりない。
閑散としているもの。

「とりあえず卵焼きと野菜炒めでいっか。ご飯はチンして…」

いつもよりも早く起きたはずが何だかお弁当のおかげでバタバタだ。

８：４５。
いつもと変わらない朝。
いつもと同じ風景。

ただ一つちがうのは、私。

実はきのう買ったばかりのあの可愛い下着をつけてみたのだ。
全然見えない洋服の下のものでこんなに気分が変わるなんて思ってもみなかった。

サボンじゃないけど何だかとってもお姫様になったような気分！

「あ…っ」
あの可愛らしいお花屋さん。
あの綺麗なお姉さんが今朝も準備をしている。

「おはようございます。今日もお仕事がんばってくださいね。いってらっしゃいませ。」

「ありがとうございますっ。…い、いってきます！」

―キラキラキラキラ♪

あ、まただ。
心が一瞬ふわっと揺れた。

１２：３０。
いつもと変わらないお昼休み。
いつもと同じ１時間休んで…

「あれ～？矢田ちゃん今日お弁当なんだ？めずらしいね～！」

同期の子が話しかけてきた。
彼女はとても可愛くて、私なんかとは別の部類だと思っていたから、新人研修以来ほぼ初めてかもしれない会話に何だかどぎまぎしてしまう。

「よかったらお昼一緒に食べよ？」

そうして屋上の室内テラスへやって来た。
本当は屋上の外にもテラスがあるのだけど、未だあいにくの雨降り。

「豊田さんはいつもお弁当なんだね。すごいね。」

「そんなことないよ〜。ただエコしてるだけだよ。」

豊田さんはそう微笑みながらお弁当のふたを開いた。

「わ―っ！可愛いね！もしかしてぜんぶ手作り？」

思わず身を乗り出してしまった。

恥ずかしい…！

こんなに可愛らしいお弁当箱の前で、私(こんな)のを開くなんてさらにもっ

と恥ずかしい…！！！

「卵焼き上手だね。野菜炒め、私も好き～！」

心まで可愛い女の子だ。

私は卵焼きを一口で頬ばった。

「卵焼きだけはなぜか昔から得意だったんだよね。でも全然、豊田さんみたいな可愛いお弁当じゃなくて恥ずかしい…っ！」

すると彼女はプチトマトを私のお弁当箱の中にちょこんとのせた。

「…？」

可愛すぎる天使の微笑み！

「たった一つ、こうやって色をいれるだけで華やかにならない？」

…確かに。

私のこんなまるで男子弁当でさえちょっとだけ可愛らしい。

「お弁当も女の子もきっと一緒だよ♪ほんのちょっとの何かで変わると思うんだ！」

”ほんのちょっとの何かで変わる”

お昼休みの終わりを告げるベルが鳴り響く。
豊田さんはお弁当箱を袋にしまいながら微笑んだ。

「豊田さん、じゃなくて歩（あゆほ）でいいよ！今度家にあるお弁当の本持って来るね♪それじゃあ午後も仕事がんばろっ！」

心が一瞬ふわっと揺れる。

「うん！ありがとう…歩ちゃん♪」

こんなに素敵なお昼休みは入社以来初めてだった。
午後も頑張れそう！

Ｌｏｖｅｌｙ４．．眠りにつくその前に。

「エリー！お風呂のお湯そろそろいいんじゃない～？！」

サボンの声にハっとした。

―キュッ、キュッ！

「…セーフ！」

って間に合ったはいいものの、私の心がまだ間に合わない。

出窓の上からサボンの声が降りてくる。

「お～い！いつまでそうしてるの？せっかくの温かいお風呂が冷めちゃうよ！」

「分かってるよ～。う～ん…でもどうしてもめんどくさいんだも～ん。やっぱりシャワーだけにしておけばよかっ…痛―っ、もう！サボン～！」

サボンのトゲは可愛らしい見た目よりもずっと痛い。

サボンはちょっと厳しく説教風に語ってくる。

「いい？その日の疲れや嫌なことはお風呂で一緒に洗い流すの。そうして心も体もぽかぽかになって眠りにつくの。」

分かってはいるけれど、どうにもやっぱりめんどくさい。

そんな私に説教は続く。

「エリー？めんどくさいんじゃなくて自分へのご褒美だって思ってみたらどう？そう思ったらとっても素敵な時間になりそうじゃない？」

自分へのご褒美…？
ご褒美…か。

今日も一日仕事をがんばった私へのご褒美。
贅沢なバスタイム？

日曜日に買ってみたバスセットを手に、お風呂場へと向かった。

「お～。花だ！」
フラワーバスソルトを
注ぎ入れた。

”湖の上に可愛いお花が咲いている”
サボン風に言うならば…？

とびっきり甘いフラワーブーケの香りに包まれながら、私は贅沢なバスタイムを楽しんだ。

「今日も一日お疲れさま。ありがとう。」
サボン風に言うならば…？

「何〜か本当にお姫様みたい♪」

甘く温かい空間に、心も体もほっとほぐれていく―

お風呂からあがってボディミルクを足にぬってみた。
優しく抱きしめるように…

「そうだ、エリー！眠りにつく前に素敵な言葉を口にしてから眠るのもおすすめだよ。」

ボディミルクのふたを閉めながら、私はサボンの話に耳をかたむけた。

「素敵な言葉？たとえば何だろう？」

「好きな人の言葉とかお気に入りの言葉とか何でもいいんだよ♪」

そういえば昔買って放置したままにしていた雑誌に…

「あったあった！この言葉すごく素敵だな～って思ったんだ♪」

「どんな言葉なの～？」

”If you want to keep your lips beautiful, you should use beautiful words.
If you want to keep your eyes beautiful, you should find other's excellences.—Audrey Hepbur

n”

「もしも美しい唇になりたいのなら、美しい言葉を使ってみて。もしも美しい瞳に憧れるのなら、他の人の素敵なところを見つけるの。」

そう口にしてみたら何だかとっても素敵な気分に包まれた。

出窓の上からサボンが静かにささやく。

「とっても素敵だね♪エリー、おやすみ。」

「そうだね♪おやすみなさい、サボン。」

Ｌｏｖｅｌｙ５．．素敵な靴に連れられて。

恋する理由って何だろう？

お昼休みに屋上の外テラスに腰掛けて、そんなことを想いながら空を仰いだ。
クリスマス限定のジンジャーチャイラテを右手に。

「グッドアフタヌ〜ン、エリー♪もしかしてたそがれ中〜？」

「歩っ！びっくりした〜。」

歩も同じお店のクリスマス限定、ホワイトラズベリーラテを手にし

ている。

「あ～♪私迷ってこっちにしたんだぁ！そっち美味しい？」

歩は私のとなりに腰をおろした。

「一口飲んでもいいよ。」

クリスマス色のカップを手に歩は幸せそうに微笑んでいる。
まるで真冬のＣＭみたいだ。

そんな幸せそうな歩に私は問いかけてみることにした。

「ねぇ…歩。恋する理由って何なんだろう？何だと思う？」

真剣過ぎる私の想いが伝わったのか、歩は真っ直ぐに私を見つめ返した。

「う～ん…難しいね。何なんだろう？」

「…やっぱり分からないよね～。」

歩は急に私の腕をつかんでキラキラした瞳で問いかけてくる。

「エリー、もしかして好きな人でも出来た？恋してるのかい？」

思わずチャイラテを口からこぼしてしまいそうになった。

「そういうんじゃないよ～！そういうのじゃなくて、本当に。」

「ふ～ん。まぁいいけど♪でも迷った時には一つ方法があるよ。知りたい？」

突然の歩のラブリークイズに釘付けになってしまう。

「…とっても知りたいっ！」

今度は私が歩の腕をつかんでキラキラした瞳でせがんでいた。

「それはね～…」

―――

１８：００。
「退勤、っと。」

仕事の帰りに寄り道をするなんて、ちょっと前の私では考えられなかった。

会社の駅の近くにあるデパート。
ガラスのケースの中には素敵な靴が飾られている。

ベリー色の、りぼんの付いた可愛らしいパンプス。
黄金の７センチヒール。

ずっと憧れていたけど、いつも見つめているだけだった。
だけどついに…

「買っちゃった…♪」

靴の箱の入った大きな袋を肩から掛けて、私は足早に家へと帰った。

「おかえり、エリー♪」

「ただいま、サボン～！」

今日考えたこと、歩と話したこと、ずっと憧れていた靴をゲットし

たこと、いろいろなことをサボンに話した。

”素敵な靴をはくと素敵な場所へ連れて行ってくれる♪”

今日のお昼休みに歩が教えてくれたラブリークイズの答えだ。

「うんうん。とっても素敵じゃない！その靴エリーにすごく似合ってるよ♪素敵なその靴がエリーを素敵な場所へ連れて行ってくれるといいね！」

サボンの言葉に胸が弾んだ。

明日は水曜日。
お休みだしこの靴を履いてどこかに出掛けてみることにしよう。
そうだ！
久しぶりに映画でも観に行ってみようかな。

―水曜日の朝。

キラキラシャワーをたっぷり浴びて、とびっきりのお洒落をして家を出た。

お気に入りのベリー色の靴と一緒にね♪

それにしても映画館に来るなんて久々過ぎてきょろきょろしてしまう。

人多いな…
平日なのに。

「…矢田さん？」

映画館の人ごみの中から少し低い声が聞こえてきた。
いま誰か私の名前を呼んだ…？

「やっぱり！矢田さんだ。横顔が何か似てるなって思って。」

振り向いた先に立っていたのは、同じ会社の平山さんだった。
私より４年先輩の平山新（ひらやまあらた）さん。

「平山さん！びっくりです。平山さんも映画観に来たんですか？」

「うん、そうだよ。僕もびっくり！」

こんな偶然あるものなんだなぁ。
いや、きっとサボンや歩なら…
偶然じゃない！
必然…いや運命～！なんてキラキラするのだろうか。

平山さんは社内でも少し有名で隠れファンもいたりする。
少しくせっ毛の黒い髪にあごに生やしたひげはいやらしくなくてちょっぴりセクシー、ダークグレーのスーツを格好良く着こなしてしまう素敵男子だ。

初めて私服を見たけどこっちの平山さんもとっても素敵だなぁ。

「もしかして矢田さんが観るのって”素敵な靴に連れられて”だったりする？」

平山さんはさっき買ったであろうチケットを見つめながら微笑っている。

「…はいっ！そうです。もしかして平山さんも？」

「はい…そうです（笑）」

―――

「それはね～…素敵な靴をはくことだよ♪」

「素敵な靴？」

「うん♪”素敵な靴をはくと素敵な場所へ連れて行ってくれる”ん

だってさ！だからお気に入りの靴を履いて出掛けてみたらきっと、
”素敵な何か”が見つかるかもしれないよ！」

Ｌｏｖｅｌｙ６．．恋する理由。

恋する理由って何だろう。

今日も屋上の外テラスでたそがれ中。
今日はこの間歩が持っていた、ホワイトラズベリーラテの方をお供に。
クリスマス限定の柄が暖かくって可愛い。

「…矢田さん？もしかしてたそがれ中？」

歩…じゃない！
平山さんだ…っ！

私は慌てて襟元や髪の毛を直した。
良くなっているかは別として。

「お疲れさまです！もしかして何回か呼びました…か？」

「うん、3回くらいかな？でも良かった！もしかして嫌われてるのかと…（笑）」

平山さんは少し下を向きながら微笑んでいる。
彼の癖だ。

そんな彼の素敵な癖に女の子はみんな恋している。

「全然っ！そんなそんな！嫌ってなんてないです！ただ考えごとしていて…それで…っ」

慌てる私に優しく微笑みながら、平山さんはとなりに腰掛けた。

「ありがとう。ごめんね？考えごとの邪魔しちゃったかな。」

あ、まただ。
素敵な癖。

その素敵な癖に女の子はみんな…

「…平山さんは」

「うん？」

「平山さんは…恋する理由って何だと思いますか？」

私は右隣りにいる平山さんを真っ直ぐに見つめた。

「恋する理由？」

「実は最近ずっとそのことについて考えているんです。でもとっても難しくて…」

「恋する理由か～…」

平山さんはそう言ったあと、右手を少し傾けてコーヒーを口にした。

クリスマス限定…
ではなく定番カラーのもの。

「それは難しいテーマだね。う～ん…矢田部長！次回のＭＴまでに資料を集めてまとめておきます。」

少しおどけた平山さんは何だかとびっきり可愛らしい。

「よろしくお願いします。」

そのあと少し話をしてお互い午後の仕事へと戻った。

―その日の夜。

「エリー？携帯光ってるよ！電話かメールじゃない？」

ちょうどお風呂からあがってボディミルクをぬり終わったところ。

「誰だろ…？」

携帯画面に流れる文字にドキッとして思わずベッドに落としてしまった。

「誰からだったの？」

「…ひ、平山さん！何だろう…私何か仕事で失敗でもしたのかな…っ。どうしよう！」

拾いあげた携帯画面をなかなか見ることが出来ない。
胸の前で両手で握りしめたまま、私は部屋をくるくる歩き回った。

「いいからとりあえずメールの内容を確認しなさい～！」

サボンのその言葉にようやく歩き回るのやめて、ベッドの上に腰を下ろした。

件名：ＭＴの件について
本文：お疲れさまです！
今日話していたＭＴの件ですが、食事も兼ねて明日の仕事の後どうですか？
もし良かったら返信待っています。
平山

「ＭＴ…」

しばらくの間、ぼ～っとしたまま携帯画面を見つめていた。

するとサボンは言った。

「それってもしかしてデートじゃない？うん…デートのお誘いだよ

！きゃっ♪」

デ、デ、デート！！！？？

この私がまさか平山さんに、まさかデートに誘われるだなんて…
クレイジーだ。

私は携帯電話を枕の下に隠した。

「何してるの？エリー？」

私も布団に包まって隠れてみる。

「いい。行かない。あとで断るメールする。うん。そうするもん！」

は～ぁ…。

サボンは大きなため息をついた。
わざとらし～く。

「どうして断るの？断る理由がどこかにあるの？行って来なよ！」

は〜ぁ…。

私もわざとらしく大きなため息をついてみせた。

「断る理由なんてないよ。でもデートする理由もないもん。」

サボンは少しの間黙ってから話し出した。

「エリー？それって”恋する理由”と一緒なんじゃない？」

「…え？」

「恋する理由もデートする理由も分からないけど…ううん！分からないからこそ、みんなしてみるんだと思うの。だってそうでしょ？恋する理由なんて分からなくても、”恋しない理由”なんてきっとどこにもないんだもの！ねっ♪」

サボンの言葉に不思議と深くうなづいていた。

私は布団に包まるのをやめて、枕を持ち上げた。

―ピコピコピコ。

「送信、っと♪」

「何て送ったの？教えて、エリー♪」

件名：ＭＴの件。
本文：お疲れさまです。
ＭＴ兼お食事について了解しました。
明日楽しみにしています。
矢田

「内緒～♪」

「え～！エリーのいじわる～！」

何だかとっても胸がドキドキする。
こんなに甘くて素敵な夜は久しぶりだ。

Ｌｏｖｅｌｙ７．．素敵な金曜日の夜？。

「おはよう、エリー！」

金曜日の朝。
ううん、デートの朝。

「お、おはよ、う…？」

だめだ…。
緊張し過ぎてぎこちなくなってしまう。
今からこんなのじゃきっと一日もたないよ…。

そんな壊れかけたロボットみたいな私に、サボンは素敵な秘密を教えてくれた。

「エリー？金曜日はね、女性がみんなヴィーナスになれる日なんだよ♪〜」

「ヴィーナス？私も…なれるのかな？」

「もっちろん！さぁ、とびっきりのお洒落をしてデートに出掛けておいで♪〜行ってらっしゃい、エリー！」

「…うん！行って来ます、サボン♪〜」

デートの洋服はワンピースを選んだ。
足元にはお気に入りの素敵な靴を連れて。

だけど変じゃないかな…。
私なんかがこんな格好しても大丈夫なのかな。

そんなことを思いながら駅から会社までの道を歩いていると、後ろの方から声を掛けられた。

「おはようございます、矢田部長。」

「平山さん…っ！」

振り返ると朝から優しい微笑みの彼が立っていた。

「今日すっごくいい天気だよね！」

「そ、そうですね…っ！」

オー、マイ、ロボット。

これから早朝会議があるらしい。
平山さんは去り際に…

「何かいつもと雰囲気が違って…素敵だね。じゃあ…また夜に！」

あぁ。
後ろ姿まで格好良い。
素敵なのはまちがいなく、私ではなくてあなたです。

「…”素敵だね。また夜に！”って何何～！？今のってもしかして～きゃ～♪”」

「歩っ！な、何でもないよ！ほ、本当に…」

歩はにこにこしながら私の左腕に右腕をからめてくる。

「君は本当に嘘をつくのが下手っぴだね♪可愛いなぁ～！エリーちゃんは♪」

私は耳まで真っ赤になりながらそっぽを向いた。

歩とは今日のお昼を一緒に食べる約束をした。

「たっぷり〝事情聴取〟させてもらうよ～♪〟」

―お昼休み。

屋上の外テラスの席で歩と二人、ランチタイム中。

私の作った卵焼きを頬ばりながら歩が私をからかってくる。

「まずはじめに…平山さんはいま会議中だからここには来ないよ！」

「えっ？別に私はそんな…っ」

「さっきからテラスのドアの方、ず～っと気にしてるみたいだったからさ！」

天使の微笑みが今日は何だか小悪魔の微笑みに見える…！

「んん…っ。」

私は咳払いをしてみせた。
歩は相変わらずにこにこしながら私を見つめている。

お昼休みの間ひたすら”事情聴取”というガールズトークが続いて、あっという間にベルが鳴り渡る。

お弁当箱を片付けながら歩は言った。

「恋のいいところは階段を上る足音たけで、あの人だってわかることだわ♪゛」

私もお弁当箱を袋にしまいながら答えた。

「ん？何それ？」

歩は微笑んでいる。

「ガブリエル・コレットだよ♪フランスの女性作家さん。」

「うん…？」

あ。

いつもの天使の微笑み！

「恋をしたんだね、エリー！素敵な恋になりますよ～に♪」

歩。
最高に可愛らしい天使の微笑みだ。

「…ありがとう！」

テラスルームのドアを出る瞬間、歩はそっと耳打ちをした。

「帰りに渡したいものがあるの！今夜のデートの待ち合わせの前に使ってみてね。”とっておきの秘密”だよ♪」

１８：００。
「退勤、っと。」

いつもとはまったく別の帰り際。
いつもとは全然ちがう気分。
だって私、これから平山さんとデートだもん！

待ち合わせ場所に行く前にパウダールームに入って、香水をふりかけた。
歩が渡してくれた”とっておきの甘～い秘密”。

「…よしっ！」

スーツ姿は会社で見慣れているはずなのに、街中に立っている平山

さんは最高に素敵で、思わず…っ！

「うわ…っ！」

「…っと！ずいぶんドラマチックな登場だね（笑）！大丈夫？」

足が”ぐにゃっ”て、
平山さんの胸に”ドンッ”て、
恥ずかしすぎて泣きそう…。

「ごめんなさい…大丈夫ですっ。本当にすみません！」

平山さんは相変わらず素敵な微笑みで、私は相変わらず変なロボット。

にこっとしながら平山さんは前を向いた。

「じゃあ…行こっか！」

「はい…！行きましょう。」

Ｌｏｖｅｌｙ８．．素敵な金曜日の夜？。

「この間の映画、”素敵な靴に連れられて”おもしろかったよね～。
」

会話をしながらも平山さんはささっとサラダを取り分けてくれる。

「あっ、ありがとうございます！とってもおもしろかったですよね。
」

…サラダがのどをとおらないっ！
慌ててお酒で流しこむ。

「でもちょっと意外です。平山さんがああいう映画観に行くなんて…」

「確かにそうかもね！実はさ…会社の子たちが話してるのを聞いたんだ。最高だったってさ。」

平山さんの顔がほんの少〜しだけ赤くなった、気がした。

「でも観に行って良かったよ！光栄にも矢田部長に会えたので。」

「も〜！からかわないでくださいよ〜。」

今度は私の顔が赤くなっている。
気のせいではなくて、確実に。

金曜日の夜のせいか店内にはお客さんがいっぱいで、こういう雰囲気のお店のせいか店内には恋人風なお客さんでたくさん溢れている。

私たちももしかして…
そんな風に見えているのだろうか。

そんなこと考えていたら余計に熱くなってきてしまった。

「矢田さん？大丈夫？」

「あ…っ、だ、大丈夫です！んん…っ。」

呼吸をととのえて、食事の再開だ。

それにしてもこのお店は雰囲気も素敵だし、出てくるお料理やお酒もどれもとっても美味しい！

チキンソテーを食べながらついつい口元がゆるんでしまう。

「ふふ。美味しい？」

「はい！とっても！幸せです～。」

「そっかそっか。良かった。」

あ、いつもの癖。

「…？どうかした？」

「いや…その、平山さん、少し下を向いて微笑むのって癖ですよね。
」

「…え！？そうかな…？」

「はい、そうです！よくやってます。」

「そっか。変…かな？」

平山さんは黒ビールにそっと口づけた。
その感じが妙にセクシーでたまらない。

「変じゃないです！変…じゃなくてむしろその、素敵…です。」

あぁ。
私って図々しく何を言っているのだろう。
恥ずかしい…。

「…？平山さん？」

ふと顔を上げると平山さんの頬が少しだけ赤くなっている。
気のせいではなくて今度は本当に赤い。

「んん…っ。えーっと…ありがとう。ん…あ、何か飲む？」

平山さんて…
何だかやっぱりとびっきり素敵で可愛らしい人！

それをきっかけに私の緊張もほぐれたのか、少しは人間らしい、”デート”を楽しむことができた。

４杯目のビールが運ばれてきて、平山さんは素敵な話をしてくれた。

「一番忙しい人間が、一番たくさんの時間を持ってるんだ。」

「一番忙しいのに？」

「そう。なぜなら忙しい人たちっていうのは、それだけやらなければならないことを抱えているから、その分有効的に時間を活用しているんだ。」

「なるほど…それじゃあ反対に暇な人っていうのは…」

「そう！一見してそういう人たちの方が時間をたくさん持っているように見えるんだけど、実はうまく活用出来ていない。彼らは単に時間を持て余してしまってるんだよ。」

「なるほど。何だかとっても深いですね。平山さんの持論ですか？

素敵です！」

「いや！アメリカの心理学者だったかな？」

そう言って子どものように笑う平山さんは可愛くてたまらない。

気がついたら時計の針はもう9時半を回っていた。
びっくりだ！

「そろそろ行こっか。送ってくよ。」

「ありがとうございます。」

―シャララランラン♪

お店のドアを出る瞬間、とっても素敵な音がした。
まるで私の心の中の恋するベルの音が聴こえてしまったのかと思うくらい！

帰り道。
平山さんはさりげなく車道側を歩いてくれている。
歩く速度も私に合わせてゆっくりと。

「その靴…」

「え…？」

「その靴すごく素敵だね！あの映画の日も確か履いてたよね？」

嬉しい！

私の足元に気が付いてくれるなんて。

「実はあの映画の日が初めてこの靴で出掛けた日だったんです。」

「そうなんだ。とっても似合ってるよ！」

「嬉しいです。ありがとうございますっ！！」

ベリー色の靴はより一層、ピンク色に染まっていく。
私の頬のように。

「…また誘ってもいいかな？今度は部長としてじゃなくて、矢田エリーさんとして。」

―ズッキュン！
ヴィーナスなはずなのにがっしり射止められてしまいました。

「はい…っ！もちろんです！ありがとうございますっ。」

あぁ。
なんて…

なんて素敵な金曜日の夜なのだろう。

Ｌｏｖｅｌｙ９．．幸せなランチタイム。

「ん～！素敵な朝だよ～サボンっ！おはよう♪」

開いたカーテンからキラキラのベールがこぼれ入ってくる。

「おはよう♪朝からずいぶんご機嫌だね～、エリー。」

「そんなことないよ～！も～サボン♪」

いや。

世界中のどこからどう見ても今朝の私はご機嫌上々だ。

朝会社へ向かう足どりもるんるんで、もしかしたらこのまま空を飛んでしまえるんじゃないかな！

「な～んてね♪」

「な～に一人でにこにこしてるのかな～？エリーさん♪」

「歩っ！おはよ♪」

「おはよう♪早く素敵な金曜日の話聞かせて聞かせて～！」

二人できゃっ、きゃっ言いながら歩道を歩く。
何だか女子高生みたいな気分！

「あ！おはようございます。平山さん。」

「え…！？」

歩の言葉に驚いて振り向くと…

「おはよう！朝から女の子は元気だね～。」

「平山さんっ！おはようございます！」

朝から出会えるなんて幸せだなぁ。

「おはよう、矢田さん。じゃあお二人さん、ガールズトークに花咲かせ過ぎて遅刻しないように、ね！」

平山さんはそう告げると颯爽と歩いて行ってしまった。

「さすが微笑みの貴公子だね。朝から爽やか〜！」

歩は、ねっ♪とにこにこしながら私の方を向いた。

今日も一日、仕事がんばろうっと。

―お昼休み。

歩は今日は急な仕事で忙しいみたい。
私は一人屋上のテラスへとやって来た。

ベンチに座り作ってきたお弁当を開く。
初めて歩とランチをした時から確実に進歩している私のお弁当の中身。

今日はなかなか可愛らしく出来上がった。

お弁当作りのいいところって、決してエコなだけじゃなくって、朝の時間を有効的に使えること。

平山さんの教えてくれた忙しい人の時間の話じゃないけど、私は今まで時間のない忙しい朝にお弁当作りなんてもったいないと思っていたのだ。

だけど実際に毎朝作ってみて思ったことは、朝の時間がいっぱい、必然的にできることもたくさん！

余裕を持って起きるからメイクや洋服選びにもたっぷり時間を使えるし、可愛いお弁当もこうして作れるし、何だか朝からとっても素敵！

「いっただきま～す♪」

プチトマトを口に入れようとしたその瞬間…

「待てっ！」

「…っ！平山さんっ！」

「あははっ！ごめん、ごめん。どうぞゆっくり召し上がれ。」

恥ずかしい…！
大きく口を開けたところを真っ正面から見られてしまった。

平山さんは私のとなりを指差して”ここ、いい？”という風な仕草をしてみせた。

「ど、どうぞっ！」

私はランチ用の袋を反対側にどかせて席を空けた。

平山さんはコンビニで買ってきたパンとコーヒーの入った袋を膝の上に乗せた。

でもなぜか真っ直ぐに前を向いたまま食べようとはしない。

「……」

「あの…よかったらお弁当食べますか？」

まるで嬉しそうにしっぽを振る子犬のように、くるっとこっちを向く平山さん。

「いいの！？いや～美味しそうだな～って思ってたんだよね♪」

「ふふ♪どうぞ。味は自信ないですけど…たくさん食べてください！」

卵焼きを頬ばりながらも微笑んでいる。

さすが貴公子？

「ん…美味しいね！俺出し巻き大好きなんだよね～。…んまっ♪」

「ふふ。幸せそうですね。よかったらこっちもどうぞ。」

私は水筒を差しだした。

「ありがと。お茶？」

ふたを開けてカップ代わりに注ぐ。

「いえ、スープです。なんちゃってポトフ？みたいな。体が温まりますよ♪」

「最高だね、矢田さん！いや～幸せだなぁ。」

こっちのセリフです。
平山さん。

こんなに幸せなランチタイムってあるのだろうか。
まるで夢の世界！

ピロリロリ～♪

平山さんは携帯画面を見つめた。
画面の上でなめらかに動く平山さんの指に思わず見とれてしまう。

「姪っ子がさ海外旅行に行くらしくてさ。」

画面を見つめたまま平山さんは私に話しかけてくる。

「姪っ子さん？」

「うん…それでこの子！しばらく俺の家で預かることになったんだ。」

そう言って平山さんは子犬の写真を見せてくれた。

「可愛いですね～！トイプードルですか？小さいぬいぐるみみたい♪」

「うん。まだわりと赤ちゃんみたい。まぁ一週間だけなんだけどね！」

それから平山さんは家族について少し話してくれた。

「うちの兄弟ってちょっと年が離れててさ。兄貴がいま３８歳なんだ。だから姪っ子との年の方が近いの。」

「へ～ぇ！」

嬉しすぎて身を乗りだして聞き入ってしまう。
平山さんもどことなく嬉しそうに話をしてくれているような気がする。

「姪はまだ２０歳なんだけど、婚前旅行だって兄貴が切なそうに電話でぼやいてたよ。」

「姪っ子さん結婚するんですか！？」

ポトフを飲みながら平山さんはいつもみたいに下を向いて微笑んだ。

「どうなんだろうね？まぁ、まだ若いから分からないけど、彼は年上でなかなか素敵な人みたいだから兄貴たちも心配はしてないらしい。」

「なるほど。楽しい旅行になるといいですよね！あ、わんちゃんの名前って何ていうんですか？」

「”トイ”だってさ。姪いわくおもちゃ箱みたいなキラキラするイ

メージでつけたらしいけど、彼には単にトイプードルの頭を取っただけだって言われるってぶつぶつ電話越しに話してたよ。」

話しに夢中になっていたらお昼休みの終わりを告げるベルが鳴り響く。

平山さんは水筒のふたを閉めながら私の方を見つめた。

「明日トイの散歩行こうかと思ってるんだけど良かったら矢田さんも一緒にどう？」

「行きたいですっ！でも明日、休日出勤なんです…」

「そうなんだ。残念だなぁ。」

「本当に残念です…。」

せっかくのデートのお誘いだったのに。

「また誘うよ。とりあえず午後もお互い頑張ろう！」

「…はい。それじゃあまた。」

Ｌｏｖｅｌｙ１０．．甘～い日曜日？。

「そんな顔しないの～元気だして！エリー、ほらっ、にこってしてみて♪」

サボンに言われて鏡に向かってにこっとしてみる。
だけどもう一人の私は苦笑いだ。

コートを羽織りながら仕事へ向かう準備をする。

「エリー？口角だけはせめてあげるように心がけてみてね。」

「…は～い。行ってきま～す…。」

今日は日曜日。
だけど私は休日出勤。

せっかく平山さんとトイとお散歩デート出来たかもしれないのに…

そんなことを考えながら会社に着いた。
自分のデスクに鞄を置き、パソコンの電源を入れて、私はため息をついた。

「矢〜田さんっ！おはようございますっ！」

ドアの方から新入社員の衛門福人(えもんふくと)君が、元気よく入って来た。

「福人君…！福人君も休日出勤？めずらしいね～。」

私は無理やり口角をあげて微笑んでみせた。

「そうなんすよ～！矢田さんもですか？お互い大変っすね。」

「うん…。でもまぁ、がんばろうね！」

「はい！」

…よし！
私も気持ちを切り替えてがんばらないとっ。

それからお昼過ぎまでひたすらパソコンに向かって仕事をこなしていた。
福人君が声を掛けてくれるまでずっと、飲み物すら一口も飲まずに…

「ありがとう～！ごちそうさま♪」

福人君がお茶を持って来てくれた。
そうして休憩がてらお昼ご飯にすることになった。

「矢田さんの弁当上手そうっすね。やっぱり料理出来る女の人は最高です！」

「ありがとう。」

福人君はいっつも元気ハツラツ！って感じで、話しているとこっちまで笑顔になってくる。

「矢田さんてあれですよね。何か口角？きゅっとあがっててて、その何ていうか…何か、可愛いっす！」

可愛い…？
私、いま、可愛いって言われた？
聞きまちがい？じゃないよね…

福人君はちょっと照れくさそうに頭をポリポリしている。

「…じゃあ俺、仕事戻りますっ！じゃあ失礼します！」

「うん…お茶！ありがとうね。」

そうして福人君はあっという間に走って行ってしまった。

それから夕方まで仕事をして、退勤作業を済ませてからパソコンの電源を切った。

福人君はこれから大学時代の友だちとご飯に行くらしく、元気よく走って帰って行った。

私も”デート”したかったなぁ…
平山さんに会いたかったなぁ…

そんなことを想いながら携帯画面を見つめていたら、突然キラキラと輝きだした…！

平山さんだ…っ！
しかも電話…っ！

「…も、もしもしっ！」

電話の向こう側から少し低くて温かい、優しい声が響いてくる。

「矢田さん？もう仕事終わったかな？お疲れ様。」

「はい！今ちょうど終わったところで…お疲れさまです。」

あぁ。
声が聞けただけでも幸せだ。

「そっか。あのさもし良かったら今から会わない？何か予定あったりするかな？」

そんなのあるわけないです…！

「…会いたいです！」

大きい声の自分にはっとして急に恥ずかしくなる。
平山さんも少し驚いているようだった。

しばらく沈黙が続いた後…

「良かった！じゃあ今から迎えに行くね。待っててね。」

まるで月９のラブストーリーみたい！

「はい！待ってます！」

Ｌｏｖｅｌｙ１１．．甘～い日曜日？。

夕陽がガラスのビルに映って何だかすごく綺麗だ。
街を行く人たちがみんな嬉しそうで、クリスマスのために着飾った街並みはキラキラしている。

まるで本当に月９のラブストーリー。
愛しい彼の迎えを待つ私は、素敵なヒロイン？

なんちゃって…！
きゃ～っ！

平山さんの迎えを待つ私は会社の近くのロータリーに一人きり立っている。
どうしてもにやけてしまう。
今日が休日で本当によかった！

―バタンっ！

「…矢田さんっ！」

「あっ！平山さん…っ！お疲れさまです。」

ダークグレーのニットに深緑色のパンツ姿。
私服もお洒落だなぁ。

「お疲れさま。…大丈夫？（笑）何か楽しいことでも考えてたの？」

「え…っ！？私何か変、でしたか…？！」

いつもみたいに優しく微笑む平山さん。

「にこにこ…いや、にやにやしてたかな。ちょっと怪しい子っぽかった！」

「もぉ～！恥ずかしい～…忘れてくださいっ！」

「あはは～！うん、忘れた！よし、行こう！」

平山さんは止めてある車の方へ歩いて行く。

今日って車なんだ！
助手席…
私なんかが平山さんの助手席に座ってしまってもいいのかな。

そんなことを考えながら下を向いてもじもじしていると…

「どうぞ♪エリーさん。」

平山さんが助手席のドアを開けて手招きをしてくれている。

まるでお姫様みたい！
…ってそんなことよりも、名前…！
今エリーって！！！

「ありがとうございますっ。失礼します…」

…！！？

「トイ〜！」

後ろの席の可愛いわんちゃんＢＯＸからちょこんとトイが顔を出している。

「家の近くにドッグカフェがあるらしくてさ！ふつうに人間が食べても美味しい料理のお店らしいから…行ってみない？」

「はい～！わぁ～！楽しみだなぁ♪」

そのお店に着くまでの少しの間だけ、素敵なドライブデートの時間。

運転中の平山さんの横顔…
素敵だなぁ。

格好良いなぁ。

「んん…っ。そんなにがっつり見つめられると運転しづらい、です（笑）」

「…！ご、ごめんなさいっ。」

「い～え。」

もう…
また素敵な癖だ。
ずるい、ずるい、ずるい！

私は景色の方に視線を移した。
だけど右側が熱い。
きっと右半分だけ赤く照っている、絶対に。

急に黙りこんだ私に優しい問いかけが降ってくる。

「矢田さんは自分の名前って好き？」

思わず体ごと右に向けてしまった！

私と平山さんの初めての会話は私の”名前”だったんだ。

新入社員として入社して一ヶ月くらい経った頃…

――一年半前の春。

「矢田エリー、さん？」

「え？あっ…！」

落としてしまった社員証を拾ってくれたのが、平山さんだったのだ。

「はい、これ。」

「あ、ありがとうございます！」

「い～え。」

この人…
素敵な微笑み方だなぁ。

「素敵な名前だね。」

「え？名前…？」

「”矢田エリー”とっても可愛らしい！」

―――

「昔は嫌いでした！でも今は…」

「今は？」

「嫌い…ではないです。」

平山さんが口にする”エリー”はいつだって最高に甘くて素敵に聞こえてしまうんだもの。

「そっか。良かった！俺は好きだよ。すごく可愛らしい名前で素敵だと思う。」

「ありがとうございます。」

その後ドッグカフェに着いて、トイと平山さんと私で食事を楽しんだ。

なんて素敵な空間なのだろう！

帰り道。
桜木町の馬車道やレンガ道を少しだけ散歩した。

平山さんはリードを右手に持ってゆっくり歩いている。

ライトアップされた横浜の景色がたまらなくロマンティックだ。

平山さんはいつもみたく少し下を向きながら、優しく微笑んだ。
今日は何だかいつもよりも甘〜い微笑み。

平山さんは自然に、そっと、左手を差しだした。

「…っ。」

”エリー、恥ずかしがらずにそのまま右手を差しだしなさい！”

一瞬サボンの声が聞こえた、ような気がした。

「…っ！」

私はきゅっと平山さんの左手を握りしめた。

温かい。
暖かい。

ぎゅ～っと、平山さんも、私の右手を握り返してくれた。

甘くて素敵な空間。

甘い甘〜い、そんな素敵な日曜日。

Ｌｏｖｅｌｙ１２．．とっておきの勝負の夜。

１１／１４～１１／１７まで
平山―長野（白馬）出張

月曜日の朝。
会社のホワイトスケジュール板に青い文字で書かれている。

毎日いるはずの平山さんが、ここにいない。
たった数日なのに…
何だかとっても寂しくて仕方がない。

デスクの上のパソコンと真剣に見つめ合う。
だけど心の中は平山さんでいっぱいだ。

初めて平山さんと手を繋いだのは先週の日曜日。
あれから一週間は何だかお互い忙しくって2、3回お昼休みを一緒に過ごしたくらいだった。

今週こそはゆっくりと、もしかしたらご飯なんて…
何て思っていたのにな。

―お昼休み。

歩とガールズランチ中。

歩が心配そうに話しかけてくる。

「そりゃあ寂しいよねぇ。”お預け状態”だもんね。」

ピンクの楊枝に刺さったミートボールを、歩は私の顔の目の前でくるくるとさせる。

「…よしっ♪」

―パクっ！

…おいしい。

「もういっそのことぎゅってしてちゅってして欲しいよね！」

まるで歩はミュージカルみたい。

ミートボールをもぐもぐしながら、顔が赤くなっていくのが自分でも分かる。

私は黙ったまま首を横に振った。

精一杯だ。

「どうした〜？エリー？」

ようやく自分の口が開く。
開いたとたん、想いがたくさんこぼれ出していく。

「…私って、もしかして魅力ないのかな…。いや、もちろん魅力なんてあるわけないんだけど…その」

落ちこむ私に天使は優しく微笑んでくれる。

「エリーはとっても魅力的な女の子だよ。とっても素敵！」

「…ありがと。」

―ピロリロリ♪

～新着メール　平山新～

「…平山さんだっ！ど、どうしようっ！」

びっくりしてまた携帯を落としてしまいそうになる。

「平山さん、何だって？」

「ん…えっと、」

件名：こんにちは
本文：何だか少し久しぶりかな？元気にしてる？
こちらはすっかり冬で寒いです。
木曜日の夜に戻る予定なんだけど会えるかな？
お土産買って行くね。
平山

歩は腕組みをしてう～むと考えこむ仕草をしてみせた。

「木曜日の夜が勝負だねっ！」

「しょ…勝負って！？」

今度は人差し指をピンと立たせて知的な女教師風？

「とびっきりの彼の”女”になるか、単なる可愛い後輩の”女の子”になるかの勝負ってこ～とっ！」

「とびっきりの…。な、なるほど。でも…なれるかな？」

「エリー？なれるかな…じゃなくって”な・る・の”！」

「はい…っ！」

歩はとびっきりのイイ女になるための極意をたたき込む！と豪語した。

そうしてベルの音と共に私たちはそれぞれの仕事へと戻った。

［月曜日、
女の勝負を決めた。］

―火曜日の夜。

「エリー、大胆～！よくそれ買えたね～！」

サボンがきゃ～、きゃ～驚いている。
私だって驚いている。

だってこんなにセクシーな下着…
私なんかに絶対似合わない…っ！

ショートケーキみたいな真白に真っ赤なフリル。
シルクのような肌触り。
真っ赤なスリップを上から着ればまるでミニサンタさん。

歩様のご命令だ。

「大切なのは”変化率”だよ！清楚なエリーはこれくらい大胆にいかなくっちゃ！」

「火曜日。
勝負に向けていざ勝負。」

―水曜日の朝。

歩と一緒に美容院でトリートメント中。

「うわ～！ツヤツヤ～！」

歩ｓルールでは何でも、とっておきの日に髪の毛のツヤは欠かせないらしい。

【水曜日。
女磨きに磨きをかける。】

明日は平山さんが帰って来る日。

いざ、勝負の夜！

Ｌｏｖｅｌｙ１３．．女の子じゃなくなる夜？。

「女の子なんかじゃない…っ。」

木曜日の夜の私の言葉。

私っていつからこんなに大胆な女の子になったのだろう。

――木曜日の朝。

「おはよう！エリー。今夜は勝負の日だね！」

サボンに念を押されて急に緊張してきた。
ドキドキする…っ！

「う、うん…っ。」

下着、ちょっとスースーする…でも何だかとってもセクシーな気分。
髪の毛も綺麗にカールをして毛先はしっとり艶やかに。
アニック・グタールの香水をふれば完璧。

私は鏡の中に映るエリーに向かって人差し指を立てた。
「いざ、勝負っ！」

――会社。

会社に着いて一番最初に会話をしたのは新入社員の衛門　福人君だった。

「…おはようございます、矢田さん！…な、何か、今日いつもと雰囲気違いますね。」

パックの珈琲牛乳を手に福人君が近づいてくる。

「おはよう。そ、そうかな…変かな？」

福人君は珈琲牛乳を飲む手を止めた。

「全然っ！変じゃないです！むしろたまんないっす！…って俺何言ってんだろっ。」

福人君は耳を赤くしてパックのストローを思いっきり吸った。

…何かちょっと可愛い！

ピロリロリ♪

件名：ファイトっ！
本文：エリー、おはよう♪
勝負に向けてエリーはよくがんばったよ！
でもね最終的に一番大切なのは、平山さんを想うエリーの純粋な気持ちだよ＾＾！
素敵な夜になりますよ～に♪〝
祈っています。

「…歩。ありがと。」

こっそりと、携帯画面に向かってつぶやいた。

私…

今夜こそがんばって、平山さんに想いを伝えようっ！

そうしてあっという間に仕事は終わり、とっておきの勝負の夜がやって来た。

平山さんとの待ち合わせは7時に桜木町駅前。
私は行き交う大勢の人たちの中から平山さんを探した。

まるでスローモーション。
改札の向こう側から平山さんが歩いてやって来る。

「…っ。」

私はごくり、と息をのんだ。

平山さんが私に気が付いて微笑む。

「矢田さん！こんばんは。」

「こ、こんばんは！出張お疲れさまでした。」

私は平山さんを見つめた。
いや、見とれている。

「とりあえず食事でもしよっか。赤レンガの中にいいお店があるんだ。」

「はい！」

そうして赤レンガに向けて二人で歩きだしたけど、とってもドキドキしてしまう。

今夜の平山さんは久しぶりに会うせいなのか、それともスーツのせい？
何だかとっても色っぽい。

濃紺のスーツから見えるのは濃い水色のシャツ。
ネクタイは新幹線の中で外してきたのか、ゆるく開いた胸元がセクシー…

「…～だよね？矢田さん？」

「…えっ！？あ…っと、ごめんなさい。ちょっとぼ～っとしてました…」

だめだ！
私いま、絶対に真っ赤になってる。
恥ずかしい…っ。

いつもと何かちがう私の雰囲気に、平山さんも気が付いたのかそれ以上何も聞いてはこなかった。

赤レンガの中の素敵なお店で食事をして、お酒も少し楽しんだ。

波の音とぼんやりと灯るレンガ倉庫のオレンジが、私の恋を奏であげる。

―シャララ～ン♪

「鐘…？」

夜の赤レンガに鐘の音が鳴り響く。

平山さんは二階の端を指差して見つめる。

「あそこに鐘があるんだよ。恋人同士であの鐘を鳴らすと幸せになれるらしい。」

……！

天使の鳴らす愛のベルの他にきっとない…！

私は上を見つめる平山さんの腕の裾をきゅっとつかんだ。

「…ん？どうしたの？矢田さん？」

「…っ。」

「…？」

大型船の汽笛が二人を包む。

「好きです…っ！」

「……」

「好きなんです！私平山さんのこと…っ」

あぁ。
ついに想いを伝えてしまった。

ドキドキを通り越して、もっともっとドキドキする。

平山さんは黙ったまま私の髪にそっと触れた。
その瞬間、ふわっと甘い香りが二人を包む。

「ありがとう。嬉しいな。」

「ごめんなさい。」

「どうして謝るの？」

「私なんかが平山さんみたいに素敵な人を好きになってしまって…
私、自分に自信がないんです。」

平山さんの指が髪のすき間から耳に触れてくる。

「矢田さんは素敵だよ。とっても可愛らしい女の子だと思う。もっと自信持って。」

平山さん…

私は耳にかかる平山さんの手をおろした。

「私…可愛らしくなんてないっ。」

「矢田さん…？」

少し心配そうな表情で平山さんは見つめている。

「私…女の子なんかじゃない…っ！」

驚いた表情の平山さんのスーツの裾に、ぎゅっと力をこめる。

「矢田さん…」

「矢田さんじゃない…っ！エリーって…下の名前がいい、です。」

最高に恥ずかしいけれど、とっても甘くて心地いい。

「そうだね。ごめん…女の子扱いし過ぎちゃったかな。」

平山さん…

「君はとっても素敵で綺麗な女性です。エリーさん。」

平山さん…！

「…”さん”はいらない…っ」

「注文多いな〜っ。」

平山さんはそう言っていつもみたいに素敵に微笑った。

「平山さん…っ、私…」

ほんの一瞬。
ふわっと甘く、二つの唇が重なる―

「…っ！」

不意打ちなんてずるすぎる…！

「もうそれ以上何も言わなくていいよ。」

「…？」

そう言って平山さんは私をぎゅ～っと抱きしめてくれた。

「大好きだよ、エリー。」

Ｌｏｖｅｌｙ１４．．女の子じゃなくなる夜？。

あぁ…
私…
とっても幸せ。

大好きな平山さんの暖かい腕の中で、幸せすぎてこのままとろけてしまいそう…

「…矢田さん！？大丈夫…っ？」

お酒と夜景と恋する魔力にやられて、私はそのまま気を失ってしまった。

ぼんやりと映る平山さんの心配そうな表情と、微かに聞こえる私を呼ぶ甘くて低い平山さんの声…

―――

「……っ??!」

目を覚ますと見知らぬ部屋のベッドの上だった。

スーツのジャケットを脱いで青いシャツ姿の平山さんが、ソファーに深く腰かけている。

目覚めた私に気付いたのか平山さんの耳がぴくっと動いた。

…ちょっと可愛い。

「あ…起きた？気分はどう？」

平山さんが私を見つめている。

平山さんの家…
平山さんの部屋…
平山さんのベッドの上…！

私はようやくこの衝撃の展開を理解した。

「私…とんでもない失礼なことを…ごめんなさいっ！」

平山さんはいつにもましてにこにこしている。

「あのさ…それはふつう、男の方が女の子に言うセリフなんじゃない？」

「え…っ？え…っと、」

平山さんはカップに入った温かいコーヒーを私の手に持たせてくれた。

「部屋に連れ込んだりしてどういうつもり…！？とかって、言うんじゃない？こういう状況（とき）、女の子って。」

「はぁ～…そうですよね。たぶん。」

平山さんの優しいトーンに安心したのか少し落ちついてきて、私はコーヒーに口づけた。

「温かい…っ。」

平山さんは優しく微笑んだあと、またソファーに戻って腰かけた。

…後ろ姿もたまらなく、好き。

平山さんの広い背中にぼんやりと見とれながら、私の口から熱い想いがこぼれ落ちてく…

「…私は…連れ込んでもらえて、とても幸せです。」

ソファーの背に手を掛けて、平山さんは驚いた表情で振り向いた。

「今夜は…とっておきの勝負の夜だったんです。だから私…」

「…勝負って、何の？」

「私との、です…」

すると平山さんはおもむろに立ち上がった。

「それで…勝負はついたの？」

「…まだ。これからです。だって夜はまだ始まったばかりでしょ…？」

「んん…っ。」

口元に手をやって平山さんは軽く咳払いをした。

「…。何だか今日の矢田さんはずいぶんと大胆だね！参ったなぁ…」

平山さんが照れてる…？

「平山さん…エリーから”矢田さん”に戻ってる。」

私は髪の毛に指を絡めながら彼に要求した。

相変わらず平山さんは照れた表情で立っている。
頭をぽりぽりしながら…

「はい。気をつけます…ふぅ〜…」

平山さんは何故だか急に深呼吸をしてみせた。

「平山さん…？」

あ…私の大好きな癖。

「…何だか調子が狂うな。」

そう言って頬を赤らめて微笑む平山さんを見ていたら、もうたまらなくなって…

「今夜は…今夜は帰りたくないっ！…です。」

「……。」

「……っ。」

「…耳まで真っ赤っか！」

まるで熟れたりんごみたいだと、私を見つめて平山さんは笑った。

「もぉ〜！笑いすぎです…っ！平山さん〜！」

…いじわるっ。

「んん…」

しばらく二人で笑い合ったあと平山さんは私のいるベッドのところまでやって来て、静かに腰を下ろした。

「平山さん…」

「新でいいよ…」

優しくそっと、私の髪に指を絡めてくる。

「平山さ…新の指…好きっ。」

細くて長い綺麗な指。

「俺はエリーの髪が好きだな…柔らかくて気持ち良い。」

髪の間からちょこんとのぞく耳に、平山さんの指がふっと触れる。

熱く照った耳に少し冷たい彼の指があたって、たまらなく気持ちいい…っ。

「エリー…愛してる。」

そうして私はこの夜、”女の子”からとびっきりの彼の”女”にな

った。

Ｌｏｖｅｌｙ１５．．ライク・ア・ビースト。

「あれあれあれ～？矢田さん…もしかしてきのうと同じ格好ですかい？」

金曜日の朝。
会社までの道を歩く私に、歩が最高の笑顔で問いかけてくる。

「ちょっと、し～っ！歩…っ！」

言うまでもなく、私は耳まで真っ赤っか。

「あれ？衛門君！おはよう！」

歩の声に振り向くと、そこには福人君が立っていた。

「福人君っ！おはよう〜。」

私も歩に続けて挨拶をする。

「福人君…？」

だけど福人君はずっと私を見つめたまま動かない。

「……っ！」

しばらく黙って福人君は走って行ってしまった。

歩と二人、首を傾げてみせたけど、正直いまの私たちの一番の興味は…

「平山さ～ん！おはようございます♪」

彼に決まってる！

「おはよう！江波さん。」

新入社員の江波さんが平山さんに何やら話しかけている。

歩はわざとらしく顔をしかめて、こっちを見つめてくる。

「おやおや～？彼女は新入社員の萌乃(もえの)ちゃんじゃな～い！何話してるんだろうね～？」

「た、ただの朝の挨拶だよ…っ！早く行かないと遅刻だよっ！」

そう言って私は会社へと急いだ。

だけど平山さん…
何を話してたんだろう？
ただの挨拶だよね…？

デスクに着いてパソコンに電源を入れた。
髪の毛をシュシュで結わいて仕事モード、開始だ。

あ〜ぁ。

きのうの夜はあんなに甘くロマンティックで幸せだったのに…
朝になればいつもの”平山さん”と”矢田さん”だ。

平山さんの方を見つめながら小さくため息をついた。

「エリーさん♪ちょっといいですか～？」

「…江波さんっ。どうかしたの？」

江波さんが話しかけてくるなんて意外だ。
一体何だろう？

江波さんに連れられて共有休憩スペースの横の窓際にやって来た。

「な、何かな？江波さん。」

彼女は胸が大きい。
いつも胸元が大胆に開いたセクシーな服装で、男性陣の注目の的？
なのだ。

胸元に揺れるネックレスに指を絡ませながら彼女は話しだした。

「平山さんて…彼女とかいるんですかね？どう思います？」

…っ！

「さ、さぁ～？どうなんだろうね…ちょっと分からない、かな…」

「…ふ～ん。まぁ、別に彼女なんて居ようが居まいがどっちでもいいんですけどね！」

江波さんは真っ直ぐに私を見つめた。

「恋愛は心（ここ）じゃなくって、体（ここ）でするものですから！」

そう言うと彼女は小悪魔風ににこっと微笑む。

「…っ。」

「それじゃあ失礼しま〜す♪」

何だかモンモンとする。

「矢田さん…？」

「福人君。」

資料を抱えた福人君が心配そうにのぞき込んでくる。

「江波に何か言われたんですか？大丈夫でしたか？」

私は口角をきゅっとあげてにっこりとしてみせた。

「大丈夫だよ！会議の準備のことでちょっと分からないことがあったみたい。」

「そうなんすか～！それなら良かったです！」

福人君は大っきく笑った。

「でも…あいつには要注意っす。」

「え…っ？」

「あいつ…同期の間でもちょっと嫌煙されてて。いわゆる”ＴＨＥ肉食女子”なんで。気をつけてください！それじゃあ失礼します！」

”ＴＨＥ肉食女子”かぁ～…

私とは正反対だなぁ…

―お昼休み。

歩から会議の準備で遅れそうとメールが来たので、先に行って待っていることにした。

今日のランチのテーマは”肉食女子”で決まりそうだ！

私はテラスのドアに手を掛けた。

どこか空いている席はあるかな…

「エリーさ～ん♪こっちこっち～！」

江波さんがこっちに向かって、爪先まで完璧に手入れされた白く細い手を振ってくる。

…その横には、平山さんがいた。

私はどこか釈然としないまま二人の座っている席の方に歩いて行った。

「エリーさんも良かったら私たちと一緒に食べませんか？」

断れるわけない。
だって肉食獣のとなりには大好きな…

平山さんは少し気まずそうに苦笑いをした。

「萌ね平山さんの微笑い方大好きっ！」

サンドイッチを無邪気に頬張りながら江波さんは大胆な言葉をどんどん口にする。

「まぁ、平山さんのことを好きなのは萌乃だけじゃないと思いますけど。でも大好きなのは萌だけ～！えへへ～♪」

…っ！

私だって…いや、むしろ私の方が絶対に！

平山さんのこと、大好きだもんっ！

「そんな風にストレートに来られると…困っちゃうなぁ…」

平山さんはますます気まずそうに、下を向いて微笑む。

だからそれがいけないんだってば…！
平山さんは何にも分かってないっ。

「…エリー？」

最強の救世主！
歩だ。

歩は一瞬でだいたいの状況を理解したらしい。

「歩さんも良かったらお昼一緒にどうぞ♪いいですよね？平山さん♪」

「え？あ、あぁ…もちろん！」

何だかすごいテーブル図式だ。
私は平山さんにちらっと目をやった。

平山さんもそっと、私の方に優しい視線を送ってくれる。

「平山さんて…」

「…ん？何かな？」

まるで本物の獣のように、江波さんは瞳をギラりとさせた。

「平山さんて…恋人とかいるんですか？」

…っ！！！

Lovely16．．子羊エリー。

「平山さんて恋人いるんですか？」

…………

絵に描いたような沈黙が流れる。

ピロリロリ～♪

「げっ！またこいつ～…」

江波さんは携帯画面をにらみつけながらスライドさせていく。

「どうかしたの？」

聞くしかない雰囲気を察して、私は江波さんに問いかけた。

「この間の合コンで知り合った男なんですけど、そういうことしたとたん彼氏面って感じで超～うざいんですよね～！」

長くギラギラと光るネイルで器用に文字を打ちこんでいる。

「そ、そういうことって…？」

獣の瞳がギラりと光る。

「男と女がすることなんて一つしかないじゃないですかっ！ねぇ、平山さん～？」

あっ！

小悪魔スマイルだ。

江波さんはコンビニの袋に食べ終わったパックを入れて、立ち上がった。

「私お先に失礼します。午後の会議の前に、”お片付け”しないといけないこと、出来ちゃったんで。失礼しま～す♪」

そう言うと小悪魔は去って行った。
嵐のような女の子だ。

「は～ぁ…」

「歩？大丈夫？」

ため息をついて歩も立ち上がった。

「何か食欲なくなっちゃいました…私もお先に失礼します。」

―コソッ♪

歩がそっと耳打ちする。

「あとはお二人で仲良くど～ぞ♪」

「…ありがと。」

やっぱり彼女は天使だ。

二人きりになったはいいものの、あんな夜のあとだし、こんなお昼のあとだし…
何から切り出そう…

「実はさ…」

先に口を開いたのは平山さんだった。

「は、はい。」

「お昼一緒に食べたいなと思って、テラスでエリーのこと待ってたんだ。」

「そうだったんですか！」

平山さん…
やっぱりすごく好き。

「そうしたらガォ〜！って襲われちゃったわけですね…」

「まぁ…そんなとこかな。」と言いながら平山さんは下を向いて微笑っている。

私はお茶をごくごくと一気に飲み干した。

「エリー？」

「平山さんのことは私が守ります。」

宣戦布告に受けて立とうじゃない！
やってやる！

「エリー？」

「守ってあげる！」

平山さんは相変わらず優しく微笑んでいる。

そうしてベルが鳴り、午後の仕事へと私たちは戻って行った。

帰ったらサボンに話いっぱい聞いてもらわなきゃ！

とりあえず今は…

「働こっと。」

—１８：００。

退勤の時間。
歩と駅までと思ったんだけど…

「ごめん～エリー。私今日残業になりそう！」

平山さんも…

件名：ごめん
本文：明日のプレゼンの準備とかでまだかかりそうなんだ。
終わったら連絡するね！

みんな何だか忙しいみたい。
一人で帰るか。

会社のエントランスを出て一人歩きだした。

「矢田さ～ん！」

「福人君っ！」

福人君が走ってこっちへ向かって来る。

「矢田さん今日は一人なんですか？良かったら駅まで一緒にどうっすか？」

本当に元気だなぁ。
とにかく若い！

福人君と私は二人で歩きだした。

「…っ。」

「大丈夫？」

「えっ！何がすっか？全然大丈夫ですよ！」

「そう。ならよかった。福人君て…何かいっつも走ってるよね！」

「えっ！そんなことないっすよ～！」

私は声を出して笑ってしまった。
息を切らしたり照れてみたり、福人君を見ていると飽きないなぁ。

―――

「平山さん！明日の会議の資料…ここに置いておきますね。」

「あぁ、ありがとう！…どうかしたの？豊田さん？」

「いえ、別に。ただ…」

「ただ…？」

「”肉食女子”も要注意ですけど…”肉食男子”にも気をつけて下さいね！」

「え…？」

「エリーは赤ずきんちゃん…いや子羊？ってことです。それじゃあ失礼します。」

―――

福人君に駅まで送ってもらって、帰り際に連絡先まで渡されちゃった。

福人君てもしかして…？

ピロリロリ♪

～着信　平山新～

平山さん…っ！

「もしもし。エリー？」

優しくて温かい、平山さんの声が耳元に広がる。

「もう家？ごめんね。一緒に帰れなくて…」

「はい。さっき帰って来ました！全然大丈夫です！平山さんはまだ会社ですか？」

「うん。もう少しかかりそうなんだよね。それより…」

「え…？」

「”全然大丈夫”はちょっと寂しいなぁ～」

「あ…っ！大丈夫じゃないです！本当は…とっても寂しいです…っ。
」

「あはは！ありがとう。」

平山さん…
やっぱり好きだよ。
会いたいなぁ。

「はぁ～…」

電話を切ったあとも余韻から抜けだせない。

「エリー？大丈夫？」

出窓の上からサボンが話しかけてくる。

「聞いてサボン～！あのねあのね…」

金曜日の夜はまだまだ長い。

Ｌｏｖｅｌｙ１７．．可愛い子羊ちゃん？。

「エリー！遅刻、遅刻～っ！」

目覚まし時計よりも大きなサボンの声に私は目覚めた。

「…っ！やばい～！」

きのう遅くまでサボンと語ってしまったせいで、大遅刻だ。

今日は残念だけどお弁当を作って行く時間はなさそうだ。

慌てて準備をして家を出た。
何とかいつもどおりの電車に乗れたおかげで、会社には間に合いそう。

「おはよう！エリー。」

平山さんだ！

「おはようございます！」

やっぱり今日もかっこいい～。

優しい微笑みもとっても素敵！

平山さんは私の方を向いて少し小さめの声で語りかけた。

「実は今日、エリーにお弁当作って来たんだ。いつも美味しいもの作って来てくれるお礼に、ね。」

平山さん…っ！

「嬉しいです…っ！ありがとうございますっ！楽しみだなぁ～♪」

本当は嬉しすぎて今すぐにでも抱きついてしまいたい気分っ！

「…っ！」

「何してんだよ！江波。」

「福人～！おはよ～♪」

「……」

「もぉ～！相変わらず福人は萌に冷たいよねぇ！」

「…俺。自分のこと名前で呼ぶような女って嫌いなんだ！」

「ふ～ん。まぁ、福人の趣味なんてどうでもいいんだけど。それよりも萌が興味あるのはあっちの方～♪」

あぁ、早く素敵なお昼休みにならないかなぁ！
平山さんの手作りのお弁当、早く一緒に食べたいなぁ。

そのためにも仕事がんばろ～っと！

―お昼休み。

私は先にテラスに行って待っていることにした。

「…んふふ♪」

幸せ～！

平山さん、早く来ないかなぁ～。

「平山さん…！」

「…江波さん。何かな？」

「平山さんもし良かったらお昼一緒にどうですか？」

「いや…ごめん！ちょっと今日は。」

「え～！一緒に食べたい～！どうしてもだめですかぁ～？」

「ごめんね…また、今度！じゃあね。」

「…っ！」

テラスのドアに釘付け。
私って本当に平山さんのことが大好きなんだなぁ。

白黒の人たちの中に急に幸せ色の平山さんが入って来る。

「お待たせ！食べよっか。」

平山さんは作って来たお弁当をテーブルの上に置いた。

「はい～！わ～ぁ、おいしそう！」

お弁当箱を開くとまるで宝石箱のようにキラキラとしている。

「どうぞ召し上がれ。」

シェフのお手製ラブランチ！

「いっただきま～す♪」

おいしいシェフランチを食べていると、平山さんは鍵をテーブルの上にコトンと置いた。

「…？」

よく分からずに平山さんを見つめかえす。

「明日は日曜日だし休みでしょ？今夜はちょっと遅くなっちゃいそうだから…先に帰って待っててて。」

…っ！！！

びっくりし過ぎて、
ドキドキし過ぎて、
嬉し過ぎて、

ちょっと泣きそうになってしまう。

「たぶん9時過ぎには帰れると思うからさ。エリー？」

「うん…それじゃあとびっきりおいしい夜ご飯、作って待ってるね！」

「ありがとう！楽しみだなぁ。」

あぁ…っ！
たまらなく幸せ～！

―１８：００。

「退勤、っと♪」

私は足早に会社を後にした。

何作ろうかなぁ～！
洋風？それとも和風がいいかな？

きゃ～！
何だか新妻みたい～！

平山さん…いや、新に早く会いたい。
早くぎゅ～って抱きしめ合いたい。

―２１：００。

「よしっ。」

「平〜山さんっ！お疲れ様です！」

「江波さん！まだ残ってたの？」

獣は夜行性だ。

「平山さんが終わるのをずっと待ってたんです。」

「よしっ♪完璧っ！」

和風麻婆なすとさばの味噌煮、鶏ささみ肉と水菜の柚子こしょう和えに、白味噌風味のお味噌汁。

ディナーの準備は完璧だ。

「平山さん…まだかなぁ♪」

Ｌｏｖｅｌｙ１８．．可愛い子羊ちゃん？。

「平山さんが終わるのをずっと待ってたんです。」

「…何か用かな？急ぎじゃなければまた今度にしてもらえると助かるんだけどな。」

「すぐ終わりますよ。話は簡潔なんで♪」

「ん…っ。…何？」

「萌の気持ちです♪続きは今度、また。お疲れ様です～！」

「……」

—ガチャ。

あ！
新、帰って来たんだ！

「おかえりなさい～！」

平山さんは少しだけ疲れているように見えた。

そりゃそうだよね。
毎日遅くまで働いてるんだもんね。

「ただいま、エリー。ん〜！何かいい匂いするなぁ？」

平山さんは優しく微笑みながらリビングの方へと歩いていく。

「じゃ〜ん！ちょっと張り切り過ぎちゃったかも…えへへっ。」

え…っ！
平山さん…？

急に後ろから平山さんが抱きしめてくる。
けっこう力強く。

「平山さん…？どうしたの？」

「……。」

「お～い♪平山さん？」

「…”新”。会社以外では”平山さん”禁止！分かった？」

「は、はい…っ。」

それから急いでお味噌汁を温めて素敵なディナータイムの始まり。

「この味噌煮、味がしみててすごい美味しいよ！うんうん…こっちも柚子が効いてて美味い。」

「よかった～♪」

幸せ～。
ふにゃふにゃしちゃう！

ピロリロリ♪

「電話？出ていいよ。」

「ううん！メールです。あ、福人君だ…」

【”肉食男子”にも気をつけて下さいね】

「…。」

平山さんは一瞬黙りこんだ気がした。

「了解、っと！これでよしっ。…新？」

「…こっちも最高だね！和風麻婆。」

「わ～い♪嬉しい！がんばった甲斐があります。」

食べ終わって少し経ってから、新が食後のコーヒーを入れてくれた。

「はい♪」

「ありがとう〜…あちちっ。」

「大丈夫？熱いから気をつけてね。」

ソファーに二人で座りまったりとする。
最高の幸せタイムだ。

「子羊エリー…か。」

新がコーヒーに口づけながら独り言のようにつぶやいた。

新の肩にほっぺたをうずめながら私も独り言のようにつぶやく。

「子羊エリー？」

「いや…何でもないよ。エリー、よしよし♪」

優しい微笑みで優しく髪を撫でてくれる新。

「幸せ～♪大～好き。」

ふと時計に目をやるともうすぐ１１時だった。

「そろそろお風呂入らなきゃだね～。先に入ってきていいよ、新。」

「一緒に入る？」

「え…っ！？えっ！」

新は真っ赤になる私を見てまたまた爆笑中。
笑い過ぎてコーヒーをこぼしそうになってしまったくらい！

「先に入ってくるね！」

コトンとテーブルの上にカップを置いて、新は立ち上がった。

「エリー？どした？」

新のシャツの裾をつまんだまま思考停止中。

「エリーちゃん〜？」

…っ！

「やっぱり一緒に入る！新と一緒にお風呂入りたい…っ。」

あぁ…

まだ湯船につかる前なのに、のぼせてしまいそう。

新はふわっと私を抱えあげた。

「へ…っ！？」

お姫様抱っこしてもらえるなんて…
夢みたい！

「かしこまりました♪」

いつもサボンが呪文のように唱えていた”女の子はみんなお姫様♪

”、そんな言葉がフワフワと魔法のように宙を舞っていた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3372y/

愛しのエリー。

2011年11月17日19時20分発行